

第4章

古代ジャワに於ける方位と神格

はじめに

バリ島には、ナワ・サンガ (nawa-sanga) と呼ばれるバリ・ヒンドゥーの宇宙を象徴する神々の体系が存在する。ナワ (ナヴァ nava) はサンスクリット語で九を意味する一方、サンガは古ジャワ語で九を表す⁽¹⁾。この神聖と考えられている九という数に対応する九柱の神々が、中心及び四方四維のそれぞれを司る守護神として適宜配置される。中尊のシヴァ (Śiva) を囲繞する形で、東にイーシュヴァラ (Īśvara), 南東にマヘーシュヴァラ (Maheśvara), 南にブラフマー (Brahmā), 南西にルドラ (Rudra), 西にマハーデーヴァ (Mahādeva), 北西にシャンカラ (Śaṅkara), 北にヴィシュヌ (Viṣṇu), 北東にシャンブ (Śambhu) が配せられる⁽²⁾ (図27)。この他に天界と地下界の神が加わり計11神を成す場合もあるが⁽³⁾, 通常は上記の九柱の神々をもってナワ・サンガと呼び習わしている。それぞれの方位に座す神々には配偶神が与えられ、また色、武器、動物、音などが配当される。シヴァを取り囲む八方神の内、ヴィシュヌ及びブラフマーを除く六神はいずれもシヴァの異称であり、中尊のシヴァの諸方が、シヴァの種々相によって守護されていることが理解される。そしてバリの屋敷地の配置に、ナワ・サンガの観念が投影されていると考えられることはすでにしばしば言及されている⁽⁴⁾。屋敷地に限らず、ナワ・サンガに見る九分法的分類、あるいは四維の四神を除く五神からなる五分法的分類は、バリの儀礼象徴において非常に顕著に見られ、また重要視されているものである。

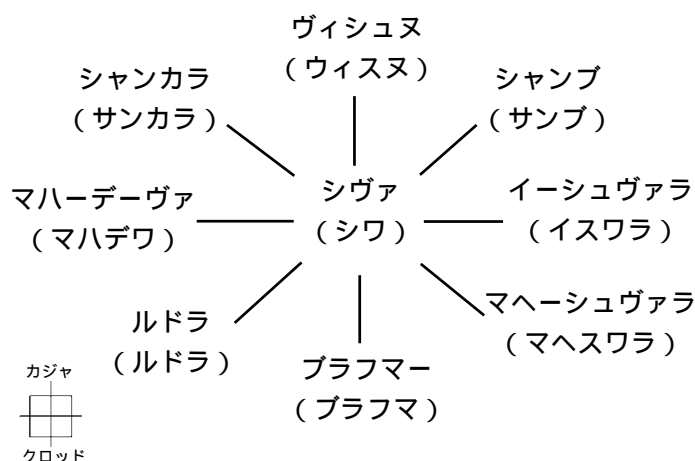


図27 ナワ・サンガ

古くからバリがジャワのヒンドゥー文化の影響下にあったとされることに関連して、ナワ・サンガの観念もジャワに由来すると見る説が有力視されている。例えばファン・ロウィゼン氏は、インドのローカパーラ (lokapāla 世界の各方位を司る守護神) の観念が中部ジャワ期 (8世紀前半頃～10世紀前半頃) のジャワに定着した後に、同じくインドに祖型を有するナワ・サンガの観念が、東部ジャワ期 (10世紀前半頃～16世紀前半頃) のジャワに将来されたものと推測している⁽⁵⁾。ファン・ロウィゼン氏は、中・東部ジャワの幾例かのシヴァ教チャンディから発見された神像の神名比定及びそれらの原位置に関する図像学的な分析を通して上記の解釈を示しているが、遺構・遺物から得られる図像学的な知見を、ジャワの歴史的な文献資料の記述と対照する考察は行っていない。

またスクモノ氏は、中部ジャワのシヴァ教の遺構であるチャンディ・ムラクで発見された神像の神名比定及びそれらの原位置に関する図像学的な分析を通して、既に中部ジャワ期のジャワにナワ・サンガの観念は存在していたと推測している⁽⁶⁾。しかし後に述べるように、荒廃著しい状態で発見されたチャンディ・ムラクに残された遺物から得られる断片的な知見のみが根拠とされる割には、やや結論を急ぎ過ぎているようにも思われる。

そして前章でも述べたようにポット氏は、ナワ・サンガの北と南に座すヴィシュヌ及びブラフ

マーが、シヴァの種々相として明らかな他の六神とは性質を異にする点に着目し、当初はシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーの三神のグループと、中尊のシヴァを囲繞する八柱のシヴァの種々相のグループが存しており、その二つのグループが中尊のシヴァを共通項として融合・一体化された結果、北と南に座を占めていた二柱のシヴァの種々相が、各々ヴィシュヌ及びブラフマーにその座を譲ることになったのではないかと指摘している⁽⁷⁾。もっとも、ナワ・サンガにおけるヴィシュヌ及びブラフマーがシヴァの異称を採るなどという事例は、ジャワの文献ないし遺構・遺物から直接確認されている訳ではなく、上記の見解は、主にネパール密教のパンテオンとの比較から導き出された類推でしかない点には留意が必要である。

以上のように、ナワ・サンガが成立した経緯をめぐって様々な考察がなされているのが現状である。しかしながらナワ・サンガがジャワに由来すると見て良いのか、またそうであれば、その成立時期はいつ頃と見られるのか。そしてナワ・サンガがジャワに定着するに至った経緯はいかなるものであるのかという問題について、ジャワに残されたヒンドゥー教（シヴァ派）の遺構・遺物から得られる実証的知見及びジャワの歴史的な文献資料の記述の両面から、改めて検討する必要があるものと考えらる。

第3章で既に指摘したように、中尊のシヴァの北・南側にそれぞれヴィシュヌ及びブラフマーを配する神格配置の原則は、中部ジャワ期から東部ジャワ期、さらにバリのナワ・サンガに至るまで通底して認められる規範であると考えられる。本章では、そうしたヒンドゥー教世界の各方位を司る神々の観念（以下、「方位神」の観念と呼ぶ）が、ジャワ及びバリのヒンドゥー教建築にどのように具現化されているのかについて更なる検討を加えると同時に、ナワ・サンガに見る九神の体系が成立するに至るまでに、「方位神」の体系がいかなる変化を遂げたかについて考察することにしたい。

第1節 バリの「方位観」との関連

冒頭において、中尊のシヴァを取り囲む八柱の神々の座所を、一般に通用する方位名称（東西南北）をもって示した。しかし、バリ島に見い出される方位感覚は、自然の地形との関連で培われた空間認識に基づくものであることが倉田氏他によって指摘されている⁽⁸⁾。ここで先ず、そうしたバリにおける「方位観」がナワ・サンガの観念と分ち難く結び付いていることを、どのように考えたら良いのかという問題について簡単に触れておきたい。

バリ島の方位は、山側／海側で示されるカジャ（kaja）／クロッド（kelod）と、太陽の出所（東）／没所（西）で示されるカギン（kangin）／カウ（kauh）の四方位の組合せから成り立つと言われる。バリ島は、分水嶺となる中央高地が境目となって南バリと北バリとを別つが、南バリと北バリではカジャとクロッドの方位が逆転することになる。つまり南バリでは、中央高地を望む北側がカジャとなり、また海へと連なる平坦な南側がクロッドとなるが、北バリでは地理的な関係が反転し、その結果南側がカジャ、北側がクロッドとなる（図28）。

そしてこのような「方位観」は、ナワ・サンガの観念と結びついてバリ島の家屋敷の配置に反映されていると考えられている。例えば南バリの屋敷地は、理念上ナワ・サンガの観念に従って九区画（3×3）に分割し得ると言われる（図29）。シヴァによって守護される中央の区画はナタル（natar）と称される庭地であり、それを取り囲む八つの区画に、種々の建物が適宜配置される。最も神聖な領域とされるカジャ・カギン側（北東側）の区画には、祖神やヒンドゥーの神々の祠が設けられる一方、劣位とされるクロッド側（海側・南側）の区画には、台所や穀倉などが設けられる。

このような屋敷地における建物の配置は、『アスタ・コサリ』（Asta Kosali）などと呼ばれるバリの建築書の記述からも裏付けることができる。これらの文書は、パルミラ椰子の葉に主に中期

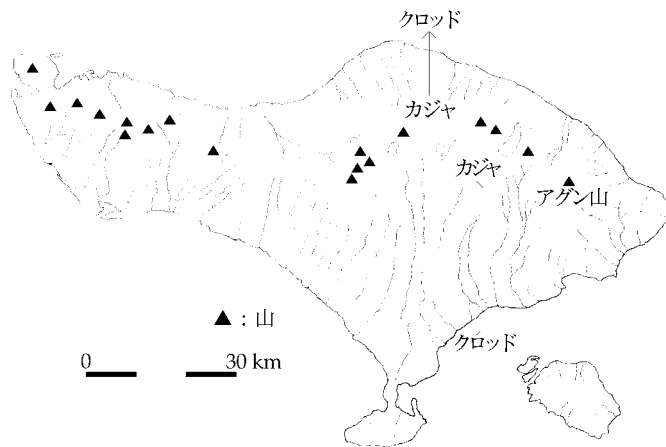


図 28 カジャとクロッドの関係（バリ島）

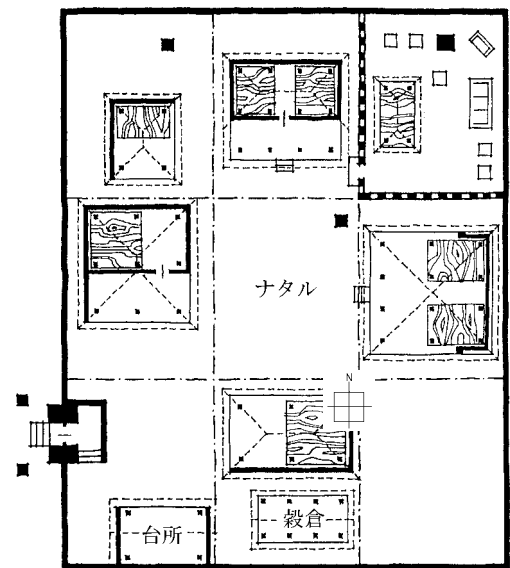


図 29 南バリの屋敷地の典型

ジャワ語で線刻され、写本を通じて司祭の家などに伝えられてきたものである。屋敷地の規模及び配置に関する規定、また各種建物の規模・配置・寸法などに関する規定、さらに各種儀礼の次第などについての記述も認められる。鏡味氏が指摘するように、バリの各地で発見された幾つかのヴァージョンには、記述内容や重点の置き方に細かい相違は見受けられるが、基本的な諸規定の構成はかなり近似している⁽⁹⁾。

まず注目されるのは、屋敷地の規模を定めるに際して、規定通りの正しい寸法が用いられれば、ナワ・サンガの神々の恩恵を授かると述べられていることである⁽¹⁰⁾。屋敷地全体が、ナワ・サンガの諸神によって守護されることが窺われる。

屋敷地の規模は、住人のカーストに応じて適正な広さが求められ、南北軸に平行な長辺と東西軸に平行な短辺を持つ方形に定められる。続いて、穀倉、台所、家畜小屋、井戸などの建物を、サンスクリットないし古ジャワ語で示された東・南東・南・南西・西・北西・北・北東のどの方角に配置するのが望ましいかが規定される⁽¹¹⁾。

台所の配置については、屋敷地の南側ないし南西側に配するのが良とされる⁽¹²⁾。先述のように、南バリの屋敷地において、台所はクロッド側（海側・南側）を占地するのが通常である。そして台所が南側に配置される理由として、鏡味氏は、「・・・それがかまどをもち、火の神ブラフマの支配する建物で、そのブラフマ神がバリの天界図で南に座す神だからである」とも指摘している⁽¹³⁾。また 1930 年代のバリ島の社会と文化を記録したコバルピアス氏は、台所の竈を作る際に用いられる粘土と同じものを使って、台所を守護するブラフマと称する土像の作られる場合があったことを記しているが⁽¹⁴⁾、このこともやはり、ナワ・サンガの南側に火神ブラフマーが座を占めることに連関すると見るべきであろう。さらに建築書において、台所を意味する paon という語の代わりに、brahma と表記される場合のあることも、上記の解釈を裏付ける傍証になるものと考えられる⁽¹⁵⁾。このように考えれば、屋敷地の北側に井戸を設けることを良とする規定が認められることの理由は⁽¹⁶⁾、それが水の神ヴィシュヌの支配する建物で、そのヴィシュヌがナワ・サンガで北側に座す神であることにも求め得ると言えるだろう。

先述のように、中尊のシヴァの北・南側にヴィシュヌ及びブラフマーを配する神格配置の原則は、中部ジャワ期から東部ジャワ期にかけてのジャワに顕著に認められる図像上の特質である。そしてヴィシュヌを「水」、またブラフマーを「火」と結び付ける観念も、ジャワにその跡を辿

ることができる⁽¹⁷⁾。このような三神の觀念が、バリのナワ・サンガに継承され、屋敷地の配置に影響を及ぼしている可能性は、否定されるべきではないものとする。さらに建築書においては、各種の建物の配置や正面方向などを定める際に述べられる各方位が、主としてサンスクリットないし古ジャワ語の東西南北で示されていることは見逃せない点である⁽¹⁸⁾。

以上の諸点に鑑みれば、ナワ・サンガは、元々ジャワに由来する東西南北で示される方位に基づいて体系化され、それが後にバリの「方位観」と結びつくことになったと見るのが最も妥当な解釈であるように思われる。この解釈の蓋然性をさらに検討すべく、次に東部ジャワ期以後の歴史的な資料の記述を見ていくことにしたい。

第2節 東部ジャワ期及びそれ以後の歴史資料に見る「方位神」

マジャパヒト王朝期（1293～1520年代）に著された『アルジュナウィジャヤ』（*Arjunawijaya* 推定成立年代：1367～79年頃）の26章4節に描出された仏教寺院に本尊として祀られる毘盧遮那は、シヴァサダー（Śivasadā）さながらであると説かれる。続く27章1節において、東方の阿門はルドラ、南方の宝生はダートリ（Dātṛ）、西方の阿弥陀はマーハー（Māhā）、北方の不空成就是ハリムールティ（Harimūrti）であると述べられる⁽¹⁹⁾（図30）。

金剛界曼荼羅の中核となる五仏に比せられる存在として、シヴァ教の五神の名が併記されている点はきわめて興味深い。中尊のシヴァサダー（サダーシヴァ）はシヴァの開展に伴って生じた一神格であり、東方のルドラは畏怖相のシヴァ、南方のダートリはブラフマーの別称、西方のマーハー（通常はマハーデーヴァと称する）もシヴァの別称、北方のハリムールティはヴィシュヌの顕現である。シヴァ系の三神が、各々中央・東・西に座す一方で、北にヴィシュヌ、また南にブラフマーの配せられることが理解される。

このように、仏教の五仏とシヴァ教の五神とを対応させる記述は、『スタソーマ』（*Sutasoma* 1379～89年頃）⁽²⁰⁾（図31）及び『クンジャラカルナ』（*Kuñjarakarṇa* マジャパヒト王朝期²¹）（図32）にも認められる。そこでは、やはりシヴァないしシヴァ系の三神が中央・東・西に座を占め、そして北にヴィシュヌ、また南にはブラフマーが配せられている。

さらに『クンジャラカルナ』の14章には、東・インドラ（Indra）、南東・アグニ（Agni）、南・ヤマ（Yama）、西・バルナ（Baruṇa ヴアルナ）、北・クヴェーラ（Kuvera）、北東イーシャーナ（Īśana）というローカパーラの神々の配列について記されている（図33）他、「・・・比類なき三柱の（神々の）住処（であるメール山）が見られ、その中央はシヴァの住処であり、南側はブラフマーの天界であり、そして北側にはヴィシュヌの住処がある」とも述べられている⁽²²⁾（図34）。なお、ローカパーラに関する記述は、『ウィラータパルワ』（*Virāṭaparwa* 10世紀末）⁽²³⁾（図35）、『ボーマカーウィア』（*Bhomakāwya* クディリ朝？²⁴）（図36）などにも認められる。

スウェレンフレーベル氏は、『コーラワーシュラマ』（*Korawāśrama* 1635年頃）の記述中に、中尊及び四方神からなる五神の体系、また中尊及び八方神からなる九神の体系とが繰り返し述べられていることを指摘している。氏によって導き出された五神の体系は、イーシュヴァラ（東）、ブラフマー（南）、マハーデーヴァ（西）、ヴィシュヌ（北）、シヴァ（中央）の五神から成る⁽²⁵⁾。この体系は、『アルジュナウィジャヤ』などに述べられた「方位神」の体系と、その基本的な構成を同じくしている。

また一方で、九神の体系は、上記の五神に四維の四神を加えて成立する。例えば、同書の7章4節には、ウマーパティー（Umāpati 東）、マヘーシュヴァラ（南東）、ブラフマー（南）、ルドラ（南西）、マハーデーヴァ（西）、シャンカラ（北西）、ヴィシュヌ（北）、シャンブ（北東）、シヴァ（中央）によって構成される九柱の神々に関する記述が認められる⁽²⁶⁾。この九神の体系の内、東のウマーパティー（シヴァ）を除く八神の座所と神名が、バリのナワサンガの神々と完全に一

致する点は極めて重要である。神々のそれぞれに付帯する色などの属性についても、『コーラワーシュラマ』とナワサンガには共通性が認められる⁽²⁷⁾。

『コーラワーシュラマ』の記述でもう一点特筆されるのは、その16章に「ティヤス・ニン・ティガ」(tyas ning tiga 三つの核)と呼ばれる観念について述べられていることである。そこでは、宇宙の中心に立つシヴァが、左手に火のついた香炉、また右手に聖水の入った器を持って、火ですべてを焼き尽し、水ですべての生き物に生命を注ぐことが述べられている⁽²⁸⁾。またブラフマー及びヴィシュヌの両神の属性として、それぞれ「火・左」及び「水・右」が配当されており、結果宇宙の中心に立つシヴァが西面し、左手(南側)の「火」に象徴されるブラフマーと右手(北側)の「水」に象徴されるヴィシュヌを両脇に従えて「三つの核」を成し、世界の帰滅と創造を行っている様子が窺われる⁽²⁹⁾。

『タントゥ・パングララン』(Tantu Panggëlaran 1635年頃)には、上記の「方位神」とは異なる神々の体系が記されている。聖山マハーメール(Mahāmeru 須弥山)の西方の門を守護する神はカーラ(Kāla)とアヌカーラ(Anukāla)の二神、また東門・南門・北門には、各々ガナ(Gaṇa ガネーシャ)、アングスティ(Anggaṣṭi アガスティア)ゴリー(Ghorī ガウリー)を配することが述べられている⁽³⁰⁾。

以上の東部ジャワ期以後の各資料に記された「方位神」の体系をまとめると、次のようになる。

まず、インドに由来するローカパーラの観念(『クンジャラカルナ』、『ウィラータパルワ』、『ボーマカーウィア』)(図37)。

第二に、中尊のシヴァの北・南側に各々ヴィシュヌ及びブラフマーを配する「三神の体系」(『クンジャラカルナ』、『コーラワーシュラマ』)(図38)。

第三に、「三神の体系」で中央に座すシヴァの東西にシヴァの種々相である二神を加えた、シヴァ及びそれを圍繞する四方神から成る「五神の体系」(『アルジュナウィジャヤ』、『スタソーマ』、『クンジャラカルナ』、『コーラワーシュラマ』)(図39)。

第四に、「五神の体系」にシヴァの種々相たる四維の四神を加えた「九神の体系」(『コーラワーシュラマ』)(図40)。四維の四神は、それぞれマヘーシュヴァラ(南東)、ルドラ(南西)、シャンカラ(北西)、シャンブ(北東)である。この九神の体系における神名、方位などがバリのナワサンガと共通することに鑑みれば、こうしたジャワに由来する東西南北で示される「方位神」の体系は、バリのナワ・サンガの観念へ受け継がれているものと考えられる。

第五に、『タントゥ・パングララン』に認められる、カーラ、アヌカーラ、ガネーシャ、アガスティア、ガウリーからなる体系が挙げられる(図41)。

次に、上記の「方位神」の体系が、東部ジャワ期及び中部ジャワ期のヒンドゥー教の遺構・遺物にどのように具現化されているかについての考察を行いたい。

第3節 東部ジャワ期の遺構・遺物に見る「方位神」

チャンディ・ジョロトウンド(推定建立年次:977年頃)は、東部ジャワのプナングガン山の中腹に建てられた沐浴場址である。この遺構から発見された石箱の内部は九つの区画(3×3)に仕切られており、またその内の二つの区画に納められていた金片に刻まれた字句に、ローカパーラで各々北東及び南東を司るイーシャーナ及びアグニの名が見えることが指摘されている⁽³¹⁾。このことによりファン・ロウィゼンは、10世紀末の東部ジャワにはローカパーラの観念が流布していたものと結論付けている⁽³²⁾。また、東部ジャワのマラン北郊のシヴァ教遺構であるチャンディ・シンガサリ(1300年頃)で発見された三体の神像を、それぞれローカパーラのアグニ、クヴェーラ、ヤマに比定する見解も提出されている⁽³³⁾。

一方、東部ジャワで最大の規模を誇るシヴァ教の遺構であるチャンディ・パナタランの主祠堂

東部ジャワの歴史資料に記された 方位神

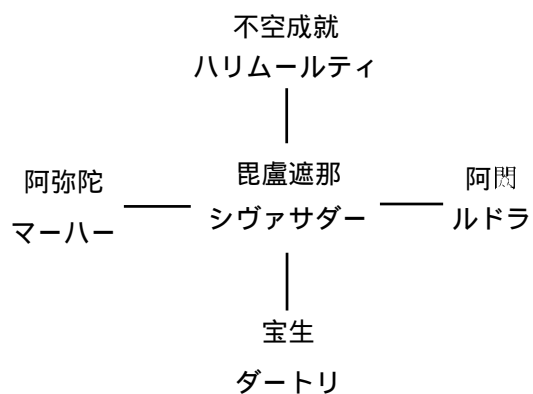


図 30 『アルジュナウィジャヤ』
(1367-79 年頃, 26-4)

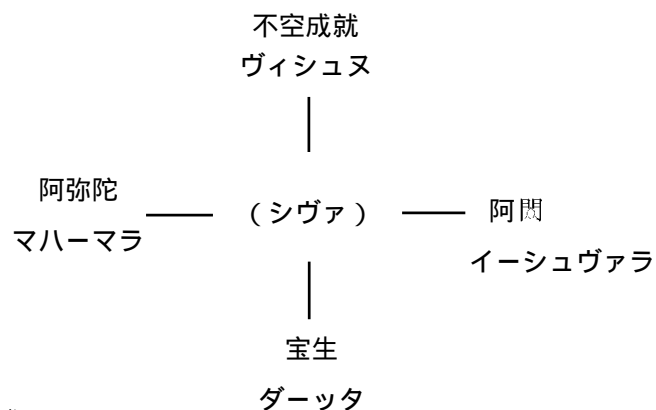


図 31 『スタソーマ』
(1379-89 年頃, 139-6)

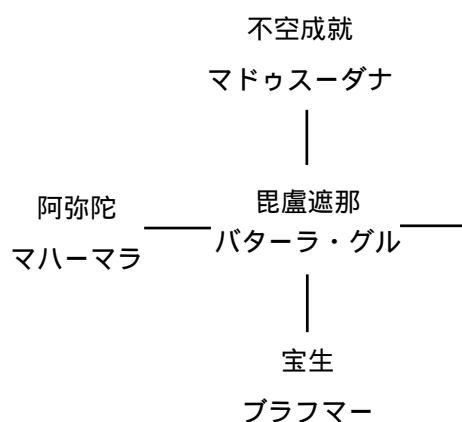


図 32 『クンジャラカルナ』(23)

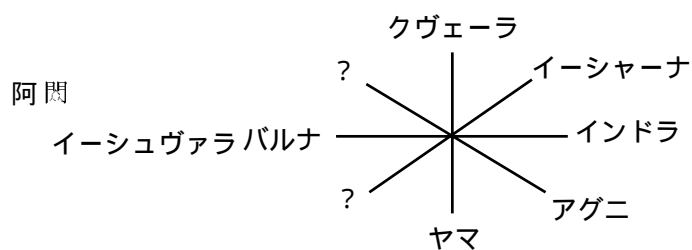


図 33 『クンジャラカルナ』 (14)



図 34 『クンジャラカルナ』 (14)

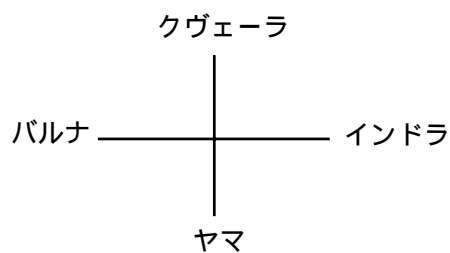


図 35 『ウィラータパルワ』
(10 世紀末)

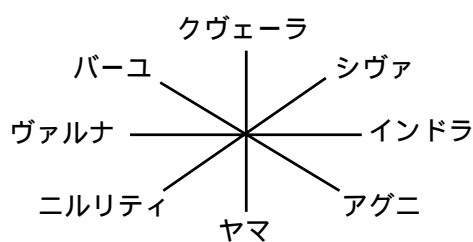


図 36 『ボーマカーウィア』
(クディリ朝期?)

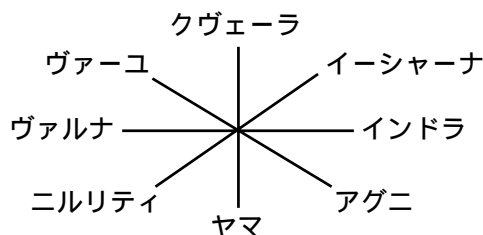


図 37 ローカパーラ（八大世界守護神）



図 38 三神の体系
『クンジャラカルナ』
『コーラワーシュラマ』

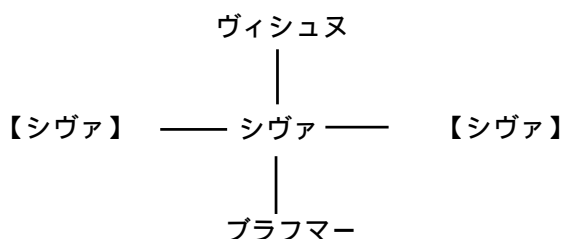


図 39 五神の体系
『アルジュナウィジャヤ』
『スタソーマ』
『クンジャラカルナ』
『コーラワーシュラマ』

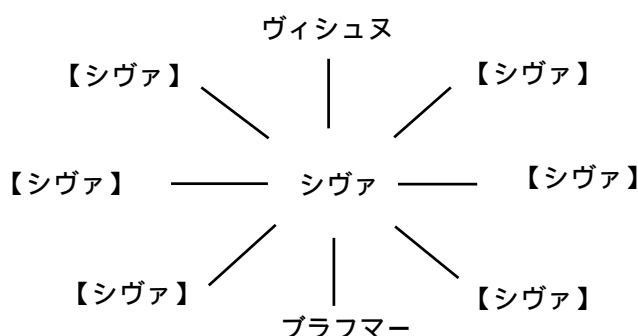


図 40 九神の体系
『コーラワーシュラマ』

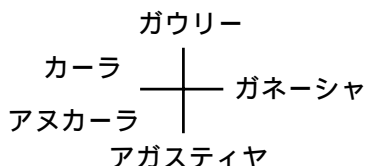


図 41 『タントゥ・パングララン』

（14 世紀頃）の北・南側の側壁中央に穿たれた壁龕には、各々ガルダに乗るヴィシュヌ及びハンサに乗るブラフマーの像が安置されていたことがクロム氏によって報告されている⁽³⁴⁾。その両像は残念ながら遺失しているため、造像の経緯をこれ以上考察することはできない。

また、ファン・ロウィゼンは、同遺構で発見された象に乗る神像をルドラに、雄羊に乗る神像をシャンカラに、また孔雀に乗る神像をカールッティケーヤ（Kārttikeya ないしシャンブ）に比定し、それらが各々主祠堂の南西・北西・北東側の身舎壁龕に安置されていたと推測している。そしてそれらの神像と、北・南側に配せられたというヴィシュヌ及びブラフマーとを併せ見れば、その神像配置にはナワ・サンガに類する観念を認め得ると指摘している⁽³⁵⁾。

神像の配置がナワ・サンガの観念に従うのであれば、主祠堂の東側（背面）及び南東側の壁龕に安置されるべき神像は、イーシュヴァラ及びマヘーシュヴァラとなるはずであり、またその各々の乗り物はナワ・サンガでは雄牛及び獅子とされるが、パナタランから発見されたもう一体の神像は雄鹿を乗り物としており、この点についてファン・ロウィゼンも幾分困惑の色を示している。本来雄牛ないし獅子とされるべき乗り物が過って雄鹿に作られたか、あるいはパナタランの主祠堂に見る神格配置の伝統は、ナワ・サンガとは若干異なるものであった可能性について

も論じている⁽³⁶⁾。しかしいずれにしても、バリのナワ・サンガへ連なると見られる神格配置の原則が、パナタランの造営された14世紀の東部ジャワに流布していた可能性が指摘されている点は注目に値する。

第4節 中部ジャワ期の遺構・遺物に見る「方位神」

中部ジャワ北部のディエン高原には、ジャワ最初期の創建と見られる祠堂群が残されている。その内の一棟であるチャンディ・スリカンディ（650年頃～730年頃）の身舎の側・背面の中央には、ピラスターで仕切られた厚肉の浮彫りが現存し、北側に一面四臂のヴィシュヌ、南側には三面四臂のブラフマーの像が浮彫りされている。背面（東側）に彫り出された一面四臂の神像は風化の度合いが著しく、尊名の比定がやや困難ではあるものの、シヴァの像であると考えられている⁽³⁷⁾。これらの諸像は、祠堂の壁面に直接浮彫りされたものであることにより、創建当初からのものであることは疑い得ない。従ってこのチャンディにおいては、中尊のシヴァの北・南側にヴィシュヌ及びブラフマーを配する図像的な構想の下に、神像が配置されていると考えられる。

「三神の体系」に従った神像の配置は、仏跡ボロブドゥールと並んでジャワのチャンディの双壁と称せられるチャンディ・ロロ・ジョングラン（9世紀中頃）にも認められる。中部ジャワのオパック河の左岸に臨むプランバナン地域の中心に位置するロロ・ジョングランの建築空間は、三重の囲繞壁によって取り囲まれた内・中・外苑によって構成され、中心の内苑には南北方向に二列に並んで計六棟の主要な建築が配置されている。その内、西側の列の三棟の中心にある最も大きな祠堂は、シヴァ・マハーデーヴァの像を安置するチャンディ・シヴァであり、その北・南側にはひとまわり小さいヴィシュヌ及びブラフマーの像を安置する祠堂を従えている。

チャンディ・シヴァの北側の側房には、シヴァの神妃ドゥルガーの像が、また南側の側房には尊師の姿として現れたシヴァであるアガ스티アが、さらに背面（西側）の後房には象頭を有するシヴァの子ガネーシャの像が安置されている。さらにチャンディ・シヴァの正面（東側）堂門の両脇に設けられた二基の小建築の内部には、シヴァの忿怒の相を表すマハーカーラ及びナンディーシュヴァラの像が安置されている。マハーカーラ及びナンディーシュヴァラ⁽³⁸⁾を除く諸像は、発見時に当位置にあったことが確認されているものであり、創建当初からのものと見る説が有力である⁽³⁹⁾。

しかしアガ스티ア及びドゥルガーの各像については、その光背のサイズが像に比して小さすぎるにより、創建当初からのものではないと見る説もある。例えばヨルダーン氏は、かつてその両像の代わりに、仏教の菩薩像が安置されていたという、かなり大胆な仮説を提示しているが、氏自らも述べているように、そのことを直証できる具体的な根拠は見出し得ない⁽⁴⁰⁾。

その一方で、ロロ・ジョングランの近傍から比較的近年になって発掘されたシヴァ教遺構であるチャンディ・サンビサリの主祠堂において、チャンディ・シヴァと同等の神像構成の認められることが確認されている⁽⁴¹⁾。このように、内陣に主神シヴァを祀る主祠堂の前面に、マハーカーラ及びナンディーシュヴァラを配し、北・南・背面に各々ドゥルガー、アガ스티ア、ガネーシャを配する構成は、管見の及ぶ限りでは、中部ジャワのグドン・ソングの遺構⁽⁴²⁾（7～8世紀頃）、チャンディ・スログリヨ⁽⁴³⁾（8～9世紀頃）、チャンディ・グバン⁽⁴⁴⁾（8～9世紀頃）、チャンディ・グヌン・サリ⁽⁴⁵⁾（9世紀頃）、さらに東部ジャワのチャンディ・バドゥ⁽⁴⁶⁾（760年頃）、チャンディ・シンガサリ⁽⁴⁷⁾（1300年頃）などにおいても確認される。従って、このような神像構成は、先学諸氏が折に触れて指摘している通り⁽⁴⁸⁾、東部ジャワ期にまで継承されるほどの拘束力を持つ規範として、一貫して強く意識され続けていたものであると考えられる。

ところで、先に引用したジャワの創世神話である『タントゥ・パングララン』においては、聖山マハーメールの西に忿怒相のシヴァであるカーラ及びアヌカーラの二神、また東にガネーシャ、

南にアガ스티ア、北にガウリーが守護神として配せられている。ガウリーとドゥルガーがいずれもシヴァの神妃ウマーの異名であることを考慮すれば、スクモノも指摘するように、上記のシヴァ祠堂における神像構成は、『タントゥ・パングララン』に述べられた神格の配置へと継承されていると見て良いであろう⁽⁴⁹⁾。

また一方で、チャンディ・シヴァの回廊の主壁、すなわち身舎脚部の浮彫りパネルに描かれた各神像の配置が、ローカパーラの観念に従ったものであることも既に明らかにされている⁽⁵⁰⁾。

以上により、先述のローカパーラの観念、「三神の体系」、『タントゥ・パングララン』に見る神格の配置は、中部ジャワ期のジャワに既に存在していたものと考えられる。それでは、残る「五神」、「九神の体系」も中部ジャワ期にまで遡ると見て良いのであろうか。次にこの問題に対するスクモノの見解を検証することにしたい。

チャンディ・ムラクは、中部ジャワのクラテンから北へおよそ4kmのカランノンコ村に在るシヴァ教の遺構である。スクモノは、チャンディ・ムラクに認められる建築及び細部意匠の様式的な特徴が、中部ジャワ北部及び南部のチャンディのそれを併せ持つものであると同時に、東部ジャワ期チャンディの様式的特徴をも先駆的に示しているとして、その創建年次を西紀900年頃、すなわち中部ジャワ期末期に位置付けている⁽⁵¹⁾。また一方でデュマルセ氏は、このチャンディの創建年次を860年頃と見ている⁽⁵²⁾。

東面するチャンディ・ムラクの主祠堂の建築構成は、基壇の上に載る身舎、さらにその上を覆う三層の屋蓋から成る⁽⁵³⁾（図42）。内部空間を有する身舎の側・背面の中央には壁龕が設けられている。身舎内部にはリンガ・ヨーニの安置されていたことが確認される他、同遺構から発見されたドゥルガー及びガネーシャの像は、それぞれ身舎の北側及び背面の壁龕に安置されていたと考えられている⁽⁵⁴⁾。先に述べたように、このような神像の配列は、ロロ・ジョングランのシヴァ祠堂などと共通する。

屋蓋各層の四面の中央にも壁龕が付され、その内、屋蓋最上層（三層目）の壁龕の内壁には、四方に面する計四体の神像が彫り出されている。それらはいずれも一面四臂の座像であり、蓮華座の上に結跏趺坐し、左右下部の手で定印を結び、右上部の手には数珠、左上部の手には払子を執っている。また、胸部に蛇を巻き付けていた痕跡も窺える。以上の諸点を踏まえ、スクモノはこれら四体の神像をシヴァ・マハーデーヴァに比定している⁽⁵⁵⁾。

屋蓋の初層及び二層の壁龕に安置されていた計八神の像は全て遺失している。しかしスクモノ

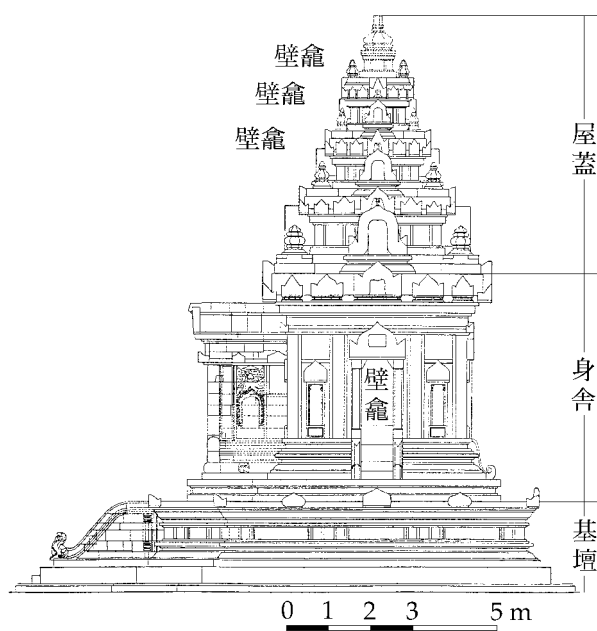


図42 チャンディ・ムラク
復原立面図（北）

は、チャンディ・ムラクの主祠堂の南側の敷地からブラフマーの座像が発見されていることに着目し、またその神像の像高と屋蓋各層の壁龕の高さとを照合した上で、当初ブラフマーの座像は屋蓋第二層の南側の壁龕に安置されていた可能性が高い点を指摘している⁽⁵⁶⁾。そして屋蓋最上層のシヴァがパラマ・シヴァ (Parama Śiva 至高のシヴァ) として顕現し、それが屋蓋第二層に祀られた四方 (東・西・南・北) の四神及び屋蓋初層の四維 (南東・南西・北西・北東) の四神とを従え、全体にナワ・サンガの観念を具現化しているとの見解を示している⁽⁵⁷⁾。

そして上記の推測に基づいた上で、チャンディ・ムラクから発見された法螺貝を握る手は元々ヴィシュヌ神像のものであり、その像が当初は屋蓋第二層の北側の壁龕に安置されていたと推測される点について指摘している。さらに同遺構から発見された神像の頭部の首の後ろに弦月が、また頭部の左側には蓮華が見えることにより、この神像の頭部は元々スカンダ (Skanda) 像の一部をなしていたと見ると同時に、スカンダはシャンカラに同定し得るという解釈の下に、ナワ・サンガで北西を守護するシャンカラの像が、屋蓋第一層の北側の壁龕に安置されていたと推測している⁽⁵⁸⁾。

上記のスクモノの解釈は興味深い視点を提供しているとは言えるが、四維の四神の像を祀るという屋蓋初層の壁龕が四方に面していることをどのように考えたら良いのかという問題に対する説明が不十分であるし、ナワ・サンガの神々に比定される神像の数が著しく限られていると同時に、神像の神名比定及び原位置の特定は推測に推測を重ねたものであると言わざるを得ない。従って、このチャンディの屋蓋にナワ・サンガの観念が具現化されていると結論するに足る十分な根拠が明らかにされているとは言い難い。

しかしながらブラフマー座像が屋蓋第二層の南側の壁龕に安置されていたとする解釈については、推測として簡単に退けることは出来ないと思われる。中尊のシヴァの四方に、南方神のブラフマーを始めとする四方神を配する神観念が、チャンディ・ムラクの造営された頃の中中部ジャワに存在していた可能性は否定できない。

しかしいずれにしても、先に引用した東部ジャワ期の諸文献に述べられた「五神」ないし「九神の体系」に基づく図像的な構想は、中部ジャワのシヴァ教の遺構・遺物にはっきりとその形跡を窺うことはできない。その一方で、ジャワ最初期の遺構と見られるチャンディ・スリカンディや、ジャワで最大の規模を誇るシヴァ教遺構であるチャンディ・ロロ・ジョングランに、「三神の体系」、すなわち中尊のシヴァの北・南側にヴィシュヌ及びブラフマーを従える神格の配置を見て取れることは特筆される点である。

第5節 ジャワにおける「方位神」の展開

ヒンドゥー教の三大神に関する記述は、古くは中部ジャワで発見された732年の碑銘を有するチャンガル碑文にまで遡る。この碑文には、シヴァ、ブラフマー、ヴィシュヌの三神を顕彰する詩頌が綴られており、またシヴァの顕彰に割かれた箇所が最も長いことから見ても、主神とされるのがシヴァであることは明白である⁽⁵⁹⁾。

一方、チャンディ・ロロ・ジョングランと、その北側に近接する仏教寺院であるチャンディ・セウの間から発見された782年の銘を刻むクルラク碑文には、ヒンドゥー教の三大神と仏教 (密教) との関連を示す興味深い記述が認められる。クルラク碑文には、ベンガルから来たとされる師僧によって文殊師利像の奉献されたことが述べられており、また「この高貴な持金剛はブラフマー神であり、ヴィシュヌ神であり、マヘーシュヴァラ (シヴァ) 神であり、一切の神々を含んだものである」との一節が記されている。石井氏は、この碑文に見える文殊は持金剛の文殊、すなわち密教の文殊師利であると推定し、ヒンドゥー教の三大神も仏智の顕われと見なされていたと推測される点について論じている⁽⁶⁰⁾。他方、チャンディ・セウの主祠堂から発見された碑文に

は、マンジュシュリー（文殊師利）・グリハと称する神殿が792年に増築されたことが記されているが、このことを根拠として、クルラク碑文に記された文殊師利像の奉献された寺院をチャンディ・セウに比定し、またクルラク碑文に記されたヒンドゥー教の三大神は、ロロ・ジョングランに併祀された三神を示すとする説も提唱されている⁽⁶¹⁾。

クルラク碑文においては、仏教の尊格の顕現としてヒンドゥー教の三大神が位置付けられていると推測されるが、石井氏も指摘するように、これに類する観念は、10世紀頃の成立とされるジャワ密教の教理書である『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン』（Sang Hyang Kamahāyānikan）の記述にも認められる。同書において、イーシュヴァラ（シヴァ）、ブラフマー、ヴィシュヌの三神は毘盧遮那の活動から出生したものとして位置付けられ、その中で世界創造の役割を与えられている⁽⁶²⁾。

以上のように、中部ジャワ期を中心とする遺構・遺物及び歴史資料の記述から窺い知れるのは、主にシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーの三神を併祀する観念である。従って、中尊のシヴァの両脇にヴィシュヌ及びブラフマーを従える「三神の体系」は、「五神」及び「九神の体系」に先行して、中部ジャワ期のジャワに存在していた可能性も考慮されてしかるべきであろう。この問題に関連して思い起こされるのは、先に考察を行った東部ジャワ期の諸文献の内、『アルジュナウィジャヤ』、『スタソーマ』、『クンジャラカルナ』の三書に述べられたシヴァ教の「五神の体系」に見る五神が、金剛界系の四方仏を含む密教の五仏に同定されていることである。

金剛界系の四方仏を基本軸とする諸尊の像を配して伽藍が形成される中部ジャワの遺構としては、ボロブドゥールやチャンディ・セウなど中部ジャワ期を代表する仏教チャンディが挙げられる⁽⁶³⁾。ジャワ仏教のパンテオンにおいて、中尊及び金剛界四仏からなる五仏が、極めて重要な座を占め続けていたことは想像に難く無い。

こうしたジャワ仏教の趨勢の中で、当初ヒンドゥー教の三大神は、仏教の尊格の顕現（クルラク碑文：782年）ないしそれから出生したもの（『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン』：10世紀頃）として位置付けられていたと推測される。しかし『アルジュナウィジャヤ』などの著されたマジャパヒト王朝期に至ると、石井氏の言を借りれば、「この時期ヒンドゥー教の三神はもはや毘盧遮那から出生したものとはみなされておらず、仏教の五仏に対応したシヴァ教の五神が生み出されている」と言えるだろう⁽⁶⁴⁾。すなわち、こうしたシヴァ教のパンテオンの推移に対応して、シヴァの北・南側に各々ヴィシュヌ及びブラフマーを従える「三神の体系」が、中尊のシヴァの東西にシヴァ系の二神格を加える形で、「五神の体系」へと変化した可能性が考えられる。

先のスクモノの分析を踏まえて、「五神の体系」が中部ジャワ期のジャワに既に存在していたと推することも不可能ではないであろう。しかし中部ジャワ期のシヴァ教の内容や実態を伝える史料が極めて乏しく、また中部ジャワのチャンディが概して著しく荒廃した状態で放置されていたものであり、そこで発見された神像の神名比定及び原位置の特定も困難を極めるケースが多く、「五神」ないし「九神の体系」が中部ジャワ期に既に存在していたか否かという問題については、残念ながら現状では推測の域を出ない。中部ジャワのヒンドゥー教の遺構・遺物に対するより詳細な図像学的な研究の進展を俟ちつつ、本章ではその結論を留保しておくことにしたい。

しかし以上のような限界を念頭に置いたとしても、中部ジャワ期に既にその存在が確認される「三神の体系」を祖型とする発展系列の中に、「五神」及び「九神の体系」を位置付けることは十分に可能であると思われる。「五神」及び「九神の体系」にしても、北と南に座を占めるヴィシュヌ及びブラフマーを除く諸神の名は全てシヴァないしシヴァの異称であり、煎じ詰めて考えれば、そこに存在するのはシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーの三神のみである。すなわち中尊のシヴァの北・南側にヴィシュヌ及びブラフマーを従える「三神の体系」に、シヴァ系の二神が加わり「五神の体系」に展開し、さらに四維にシヴァ系の四神を加えて「九神の体系」を成し、よりいっそう組織的な神々の体系が整備されたものと推測される。

さて、ファン・ロウィゼンは、ナワ・サンガの神々の内、ヴィシュヌ及びブラフマーを除く諸神がシヴァの種々相である一方、ジャワのヒンドゥー教の祖地であるインドにも、ムールティアスタカ (Mūrtyaṣṭaka) や八種のバイラヴァ (Bhairava) 神といったシヴァの種々相からなる八神の体系が存在することを根拠として、インドに祖型を有するナワ・サンガの観念が、14世紀の東部ジャワにインドから将来された可能性が高いと指摘している⁽⁶⁵⁾。しかしながらムールティアスタカないし八バイラヴァと、ナワ・サンガの諸神とが必ずしも対応しない点について十分な説明がなされているとは言い難く⁽⁶⁶⁾、インドから何らかの影響があった可能性は否定できないにしても、ジャワにおける内的・自律的な発展の契機を顧慮しないその見解は、再考を促されると言わねばならない。またポットも、ナワ・サンガに先行してシヴァの種々相からなる八神の体系が存在していた可能性を示唆しているが、その体系の存在を裏付ける文献ないし考古学上の根拠を明らかにしてはいない⁽⁶⁷⁾。

しかし一方で、ファン・ロウィゼンによって、ナワ・サンガとローカパーラの八方神の持物に共通性の認められることが指摘されている点は注目に値する。「九神の体系」が成立を見るにあたり、ローカパーラの影響が及んだ可能性は一考に値するものと言えよう⁽⁶⁸⁾。

第6節 小結

ジャワ島及びバリ島には、ヒンドゥー教世界の各方位を司る神々の観念、すなわち宇宙論的な秩序の下に、ある特定の神が一定の方角と関係を有するという思想が存在する。

本章では、そのような「方位神」の体系がいかなる変化を見せたかについて考察を行った。その結果、中尊のシヴァの北・南側にヴィシュヌ及びブラフマーを従える「三神の体系」⁽⁶⁹⁾に、東西を司るシヴァ系の二神が加わり「五神の体系」へと展開し、さらに四維にシヴァ系の四神が加わり「九神の体系」を成し、よりいっそう組織的な「方位神」の体系がジャワで整備されるに至り、またそれがバリのナワ・サンガの観念へと継承されていると考えられる点を明らかにした⁽⁷⁰⁾。

本章で取り上げたジャワのシヴァ祠堂の壁龕ないし側・後房に安置された神像の配置や、各祠堂の内陣に祀られた神像の位置関係などには、上記の「方位神」の観念の影響を認め得る。換言すれば、宇宙論的な秩序の一端を示すと想像される「方位神」の観念は、シヴァ教チャンディの平面形態や伽藍構成などの建築空間を規定する重要な要素のひとつである可能性が考えられよう。

先述のようにポット及びファン・ロウィゼンは、インドあるいはネパールなどジャワ島外のヒンドゥー文化に、「方位神」の観念の着想を求めていた。インドからの一定の影響は当然有ることが想定されるにしても、筆者はむしろ、バリと最も密実な関係を有していたことの明らかな古代ジャワにおけるヒンドゥー教及び仏教の方位及び神格の分析を通じ、ナワ・サンガがジャワの「方位神」の体系の発展系列に位置付けられるという新たな説の提示を試みた次第である。

しかし筆者のこの説は、青山氏によって更なる検証を受けている。筆者が「五神の体系」の根拠として挙げたのは、古代ジャワ語文献はいずれも仏教系の文献四点であり、またその内の三点では、密教の五仏に対応させる形でヒンドゥーの「五神」が位置付けられている。そして残り一点の成立時期が、マジャパヒト朝の末期であることを考慮すると、筆者の言う「五神の体系」は「もともとは仏教徒の側がヒンドゥー教の体系を仏教の認識枠に取り込むために構想された体系であり、ヒンドゥー教徒側による受容はかなり遅れ、かつ、部分的であったと理解したほうがよいのではないか」と青山は指摘している⁽⁷¹⁾。確かに密教の五仏を基軸とするヴァリエーションの中で成立したとされる密教遺跡がジャワに少なからず存在しているのに対し、「五神の体系」の各々の神格の神像を安置する祠堂によって伽藍が構想されていることの明らかなシヴァ教寺院は現認されない。

さらに青山は、「ジャワ仏教の影響のもとにヒンドゥーの『方位神』が発達したとする小野の論旨の骨子は正しいと思われる」としながらも⁽⁷²⁾、しかしながら「五神の体系」がジャワにおいて仏教徒以外、つまりヒンドゥー教徒にも広く受容されていたことを示す例証は乏しく、むしろ密教の五仏と同一視された「五神の体系」をそのまま受容することを避けるために、ローカパーラなどの影響を受けつつ「九神の体系」が成立した可能性も考慮されてしかるべきと論じている⁽⁷³⁾。

「三神の体系」は中部～東部ジャワ期にまで通底して、そして「九神の体系」は東部ジャワ末期以後、現在のバリに至るまでその存在をヒンドゥー教側の資料・遺物から確認することが出来る。問題となるのは「五神の体系」であるが、その存在を例証する資料が仏教側のものに限られるため、それはむしろ仏教徒の側によってまず創出された体系であり、ヒンドゥー教徒による受容はかなり遅れ、早くとも東部ジャワ期の末期以後と見るべきというのが青山の論旨である。

しかし第3章で述べたように、ジャワのヒンドゥー諸寺院の敷地の中心点、そして八方位に位置する地点に置かれたリング状の立石を、そのまま素直にシヴァの別神格九神と見なせば、ジャワ・ヒンドゥーの代表作であるチャンディ・ロロ・ジョングランは、シヴァの別神格八神によって中央神格のシヴァが、さらにはヒンドゥー教の三大神が取り囲まれる図像としてその伽藍が構想されていると理解することが出来る。そしてこの図像はまさに、バリのナワ・サンガの観念と符号するものである。そしてナワ・サンガの観念とロロ・ジョングランの伽藍に見る図像には類縁性が認められるだけでなく、中部ジャワ期から連綿と継承される神格配置の発展系列の中に各々を位置付けることが出来る点を本章で明らかにした次第である。

以上を偶然の産物と言うには、余りにも出来過ぎてはいないだろうか。中心と八方位にシヴァを配する宇宙論的な図像（「九神の体系」）、あるいは「五神の体系」が、そのままの形では無いにしても、それらが中部ジャワ期のジャワに萌芽的な形で存在していた可能性は、少なくとも否定されるべきではないであろう。

注記

(1)sanga は現代のジャワ語及びバリ語でも九を意味する。

(2) Damsté, H. T., “Balische oudheden”, *Oudheidkundig Verslag* 1922, Weltevreden: Albrecht & Co.・’s-Hage: M. Nijhoff, 1923, pp. 74-75; Damsté, H. T., “Balische kleedjes en doeken, verband houdende met Eeredienst en Doodenzorg”, *Gedenkschrift Koninklijk Instituut Taal Land- en Volkenkunde*, 1926, pp. 254-264; Goslings, B. M., ‘Een “nawa-sanga” van Lombok’, *Gedenkschrift 75-jarig bestaan v. h. Kon. Inst., The Hague*, 1926, p. 202

バリ及びジャワにおける各神名の綴りと呼称は、例えばŚiva(シヴァ)がSiwa(シワ)になるなどインドのそれとは若干異なるが、本稿では便宜上、インドのサンスクリットの綴りと呼称に従って神名を記すことにする。

(3) 天界にパラマシヴァ (Parama Śiva), 地下界にサダーシヴァ (SadāŚiva) を配する場合や (Scholte, J., “De Slametan Entas-Entas der Tenggereezen en de Memukur=Ceremonie op Bali”, *Handelingen van het Eerste Congres voor de Taal, Land- en Volkenkunde van Java, Solo*, 1919, p. 83), 天界にグル (Guru), 地下界にダルマ (Dharma) を配する場合などがある (Lohuizen-De Leeuw, J. E. van, “The Dikpālakas in Ancient Java”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 111, 1955, p. 373)。

(4) Tan, Roger, Y. D., “The domestic architecture of South Bali”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 123, 1967, pp. 442-475; 倉田勇『『民俗方位』の一考察』『天理大学学報』第82輯, 1972, pp. 128-137; 鏡味治也「バリ島の住居と世界観」渡邊欣雄・三浦國雄編『風水論集 環中国海の民俗と文化』凱風社, 1994, pp. 400-424

- (5) 前掲書注(3) pp. 383-384
- (6) Soekmono, R., *Candi Fungsi dan Pengertiannya*, Ph. D. thesis Universitas Indonesia, 1974, pp. 207-210, 236-237
- (7) Pott, P. H., *Yoga and Yantra: their interrelation and their significance for Indian archaeology*, The Hague: Martinus Nijhoff, 1966 [First published in Leiden, 1946; Translated by Rodney Needham], pp. 135-136
- (8) 前掲書注(4) pp. 443-446 や前掲書注(4) pp. 128-134 などを参照のこと。
- (9) 前掲書注(4) p. 407; Kagami, H., *Balinese Traditional Architecture in Process*, Inuyama: Little World Museum of Man, 1988, pp. 16-31
- (10) *Asta Kosali* [L. 04. A], the original was kept at A. A. Alit, Melkangin Tabanan, p. 21; *Asta Patali* [L. 06. A] the original was found at Nang Raun Br. Lenganan, Tabanan, and is now kept at Gedung Kirtya (Iontar-leaf document No. 201), p. 34; *Asta Kosali* [L. 15. A], the original is kept at I. Gusti Agung Oka, Balun, Denpasar, p. 17
- (11) サンスクリット語系の purwa; purwa (東), gneja; agneja; genean (南東), daksina (南), neriti (南西), pastjima; pastima; pascima (西), bajabya; bayabiya; wayabiya; wayabya (北西), utara (北), ersania (北東), そして古ジャワ語 (ないし現代ジャワ語) の wetan (東), kidul-wetan (南東), kidul (南), kidul-kulon (南西), kulon (西), lor-kulon (北西), lor (北), lor-wetan (北東) が併用ないし混用されている。
- (12) *Darmaning Asta Kosala* [L. 01. A], the original was found at Br. Uma-Abian, Marga Tabanan, and is now kept at Gedung Kirtya (No. 361), pp. 3-5; *Hasta Bumi* [L. 02. A], the original was found at Br. Sintring. Abian Semal, Badung, and is now kept at Gedung Kirtya (No. 243), pp. 4-5; *Asta Kosali* [L. 04. A], pp. 26-27; *Hasta Kosali* [L. 05. A], the original was kept at Pedanda Made Sidemen, Gria Taman Sanur, Badung, pp. 13-14; *Asta Patali* [L. 06. A], p. 36; *Swa Karma* [L. 07. A], the original was found at Br. Singaraja. Buleleng, and is now kept at Gedung Kirtya (No. 833), p. 18; *Wiswa Karma* [L. 08. A], the original was found at Puri Celuk Negara, Amlapura, and is now kept at Gedung Kirtya (No. 181), p. 3; *Asta Kosali* [L. 13. A] the original was found at Gria Lodrurung Riag Gede, Tabanan, and is now kept at Gedung Kirtya, p. 3; *Asta Kosali* [L. 15. A], p. 8
- (13) 前掲書注(4) p. 406
- (14) ミゲル・コバルピウス『バリ島』関本紀美子訳 [原著は, Covarrubias, M., *Island of Bali*, New York: Alfred A. Knopf, Inc., 1936] 平凡社, 1991, p. 118
- (15) *Darmaning Asta Kosala* [L. 01. A], p. 4; *Swakarma* [L. 07. A], p. 18
- (16) 井戸の配置について, *Hasta Kosali* [L. 05. A], p. 14 は, 「東側 (に配置される場合), (戸主は) 誹謗され続ける。南東側, 負債 (を負い), 不幸 (となる)。南側, 口論 (が絶えず), 破滅 (に陥る)。南西側, 良。西側, 教典を失う。北西側, 長寿 (を授かる)。北側, 程々に良。北東側, 良, 相応しい。」と述べている。また *Asta Kosali* [L. 15. A], p. 8 にもほぼ同等の記述が認められる。従って, 北西・北・北東側に井戸を設けるのが概ね望ましいということになる。しかし一方で, 南西側に井戸を置くことも良とされるのは, 井戸と台所とを近接させることによって, 水仕事の利便性を向上させることが配慮されているのであろうか?
- (17) 後に述べるように, ジャワの創世神話の一つである『コーラワーシュラマ』には, シヴァの北・南側にヴィシュヌ及びブラフマーを配すること, またその両神の属性として, 各々「水」及び「火」が配当されることが記されている。また中部ジャワ出土の西紀 902, 903 年の碑銘を有するパングムラン (PaAgumulan) 碑文などには, シーマ定立の儀礼に際して sang hyang brahmā と称する聖火を用いることが述べられている (Titi Surti Nastiti; Dyah Wijaya Dewi; Richadiana Kartakusuma, *Tiga prasasti dari masa Balitung*, Jakarta: Pusat Penelitian Arkeologi Nasional,

- 1982, p. 34, 46; Zoetmulder, P. J., *Old Javanese-English dictionary*, Vol.1, 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff, 1982, p. 254 ）。ブラフマー神と「火」を関連付ける観念が、かなり古い時代のジャワに存在していた可能性も考えられる。
- (18) ごく稀に、バリの「方位観」に基づく「カジャ（山側）」、「クロッド（海側）」、「カギン（東）」、「カウ（西）」が用いられる場合もある（*Asta Kosali* [L. 13. A] , p. 5; *Hasta Bumi* [L. 02. A] , p. 5 など）
- (19) Supomo, S. ed., *Arjunawijaya. A Kakawin of Mpu Tantular*, The Hague: Martinus Nijhoff [Koninklijk Instituut Voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Bibliotheca Indonesica 14] , 1977, pp. 122-123, p. 222
- (20) 同書の139章6節には、阿閼 - イーシュヴァラ（シヴァ）、宝生 - ダーッタ（Dātta ブラフマー）、阿弥陀 - マハーマラ（Mahāmara シヴァ）不空成就 - ヴィシュヌと述べられている（Santoso, S., *Sutasoma. A Study in Javanese Wajrayana*, New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1975, pp. 81-82 ）。また、シヴァないしシヴァ系の神格が中央神格として立てられていることは明らかである。
- (21) 同書の23章には、阿閼 - イーシュヴァラ、宝生 - ブラフマー、阿弥陀 - マハーマラ、不空成就 - マドゥスーダナ（Madhusūdana ヴィシュヌ）毘留舎那 - バターラ・グル（bhaṭāra Guru シヴァ）と述べられている（Teeuw, A. and Robson, S. O. ed., *Kuṇjarakarṇa Dharmakathana. Liberation through the Law of the Buddha*, The Hague: Martinus Nijhoff [Koninklijk Instituut Voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Bibliotheca Indonesica 21] , 1981, pp. 124-125 ）。
- (22) 前掲書注(21)pp. 108-109
- (23) 同書の70章29節には、インドラ、ヤマ、バルナ、クヴェーラからなる四大世界守護神（catur-lokapāla）の名が見えている（前掲書注(17) p. 315 ）。
- (24) 同書の47章3節には、インドラ、アグニ、ヤマ、ニルリティ（Nirṛti）、バルナ、バーユ（Bāyu ヴァーユ）、クヴェーラ、シヴァ（イーシャーナ）からなる八大世界守護神（astalokapāla）の名が連記されている（前掲書注(21)p. 25 ）。また、西紀840年の銘を有するクティ（Kuṭi）碑文にも、その記述の認められることが指摘されている（前掲書注(21)p. 24 ）。
- (25) Swellengrebel, J. L., *Korawāçrama. Een Oud-Javaansch Proza-geschrift, uitgegeven vertaald en toegelicht*, Santpprt: Mees., 1936, p. 30; J. L. スウェレンフレーベル「コラワスラム（部分）」宮崎恒二・遠藤央・郷太郎 編訳『オランダ構造人類学』せりか書房, 1987, p. 142
- (26) 前掲書注(25) pp. 48-49
- (27) 前掲書注(7)pp. 133-134
- (28) 前掲書注(25) p. 170
- (29) 前掲書注(25) pp. 32-33; 前掲書注(25) p. 145
- (30) Pigeaud, Th. G. Th., *De Tantu Panggëlaran. Een Oud-Javaansch Proza-geschrift, uitgegeven, vertaald en toegelicht*, 's-Gravenhage: H. L. Smits, 1924, pp. 96-97
- (31) このような箱は、一般に deposit box などと呼ばれるものであり、特殊な文字や図柄を線刻した金属片などが内部に納められ、それがチャンディの要所に配せられていたことが知られる（前掲書注(6)pp. 23-79 ）。
- (32) 前掲書注(3) p. 376
- (33) 前掲書注(3) pp. 356-371
- (34) Krom, N. J., *Inleiding tot de Hindoe-Javaansche kunst*, Vol. 2, 's-Gravenhage: Murtinus Nijhoff [First edition 1920] 1923, p. 261
- (35) 前掲書注(3) pp. 371-376 現在のチャンディ・パナタランは、重層の基壇のみが残り、身舎から上部を欠いている。
- (36) 東部ジャワのプリタル近傍に在るチャンディ・スンプルジャティ（14世紀後半頃）から発見

された石材に、八方神の乗り物の図像が彫り出されていることが報告されている。そこに描かれた乗り物は、各々ナーガ（東）、孔雀（南東）、ハンサ（鷺鳥 南）、?（南西）、亀?（西）、豚?（北西）、ガルダ（北）、犀（北東）とされる。北のガルダがヴィシュヌ、また南のハンサがブラフマーの乗り物である点に限りナワ・サンガと共通性を見出し得るが、それ以外の乗り物はナワ・サンガの諸神の乗り物とは異なっている（Damais, L. C., “Tentang perlambangan warna pada mata angin”, *Epigrafi dan sejarah Nusantara, pilihan karangan Louis-Charles Damais*, Jakarta: Pusat Penelitian Arkeologi Nasional, 1995, p. 142 [Seri Terjemahan Arkeologi No. 3, original title: “Études javanaises III: A propos des couleurs symboliques des points cardinaux”, *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, LVI, Paris, 1969, pp. 75-118]）。従って、ナワ・サンガと類縁性を持ちつつも、それとは異なった「方位神」の体系が東部ジャワに存在していた可能性は高いと言える。しかし一方で、東部ジャワのモジョワルノに在るチャンディ・リンビから発見された石材には、ナワ・サンガ及びローカパーラの諸神の持物の図柄を描くとされる石材も発見されている（前掲書注(3) pp. 375-376）。

- (37) 千原大五郎『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会，1975，pp. 105-106
- (38) マハーカーラ及びナンディーシュヴァラは、発見当初はチャンディ・シヴァの前房に置かれていたという（Bernet Kempers, A. J., “Prambanan 1954”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 111, 1955, p. 27）。それらを現位置へ移したことの根拠は不詳。
- (39) IJzerman, J. W., *Beschrijving der oudheden nabij de grens der residentie's Soerakarta en Djogdjakarta*, Batavia: Landsdrukkerij, 1891, pp. 49-50; Krom, N. J., *Inleiding tot de Hindoe-Javaansche kunst*, Vol. 1., 's-Gravenhage: Murtinus Nijhoff, [First edition 1920] , 1923, pp. 472-487 など。
- (40) Jordaan, Roy. E. ed., *In Praise of Prambanan: Dutch Essays on the Loro Jonggrang Temple Complex*, Leiden: KITLV Press, [Koninklijk Instituut Voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Translation Series 26] 1996, pp. 79-84
- (41) 1966年に、地中に埋没した状態で発見されたチャンディ・サンビサリは、遺跡の保存状態が極めて良好であった。内陣にリング・ヨーニを安置する主祠堂の身舎もほぼ完全な形で遺存しており、その前面の入り口両脇の壁龕にはマハーカーラ及びナンディーシュヴァラ、また北・南・背面の壁龕にドゥルガー、アガ스티ア、ガネーシャの各像が安置されていたことが確認されている（Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan, *Dua puluh tahun pemugaran Candi Sambisari*, Yogyakarta: Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala Daerah Istimewa Yogyakarta, 1988, p. 4）。
- (42) グドン・ソングの第三グループの主祠堂は、上記の五像が、完全な形で遺存する最古の事例と見られる。また、微妙に大きさの異なる主祠堂の各壁龕に、等しいサイズの石造パネルが各々嵌め込まれ、それらに神像が浮彫りされていることから見ても、諸像は創建当初からのものと見て良いと思われる。
- (43) 同遺構の各壁龕にも、上記の五像の存在が現認される。
- (44) 現状の遺構で確認されるのは、祠堂前面のナンディーシュヴァラ及び背面のガネーシャ像のみ。
- (45) マハーカーラ像が、同遺構の主祠堂の前方から出土していることから、その像は主祠堂前面の壁龕に安置されていた可能性が高い（Nugrahani, D. S., Priswanto, H., Fauzi, I. ed., *Laporan ekskavasi penyelamatan situs Gunungsari* 1998, Kantor Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala Propinsi Jawa Tengah dan Jurusan Arkeologi Fakultas Sastra Universitas Gadjah Mada, 1998, p. 37）。
- (46) 現状の遺構で確認されるのは、主祠堂北面の壁龕のドゥルガー像のみ。遺構が発見された当時は、南面の壁龕にアガ스티ア像が安置されていたという（Haan, B. De, “Tjandi Badut”, *Oudheidkundig verslag* 1929, Weltevreden: Albrecht & Co., 1930, p. 252）。

- (47) 同遺構でも，上記五像が適所に安置されていたことが確認されているが（Bernet Kempers, A. J., *Ancient Indonesian art*, Amsterdam: Van der Peet, 1959, pp. 78-79）その殆どはオランダに持ち去られている。
- (48) Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië, *Oudheidkundig Verslag* 1927, Weltevreden: Albrecht & Co.・’s-Hage: Murtinus Nijhoff, 1928, p. 15; 前掲書注37)p. 123 など。
- (49) 前掲書注(6)p. 206 シヴァ祠堂が西面する場合には，中心内陣に安置されるシヴァ神像なしリンガに対するガネーシャ像の位置は東側になる。
- (50) Tonnet, M., “De godenbeelden aan den buitenmuur van den Çiwa-tempel te Tjañdi Prambanan en de vermoedelijke leeftijd van die Tempelgroep”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 60, 1908, pp. 128-149; 前掲書注3) pp. 356-384; Jordaan, Roy E., “Sūrya and Nairṛta on the Īva temple of Prambanan”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 148, 1992, pp. 59-67
- (51) Soekmono, R., *Tjandi Merak*, Skripsi Sarjana Universitas Indonesia, 1953, pp. 1-39
- (52) Dumarçay, J., *Histoire de l’architecture de Java*, Paris: École Française d’Extrême-Orient[Mémoires Archéologiques 19], 1993, p. 287
- (53) 発見時のチャンディ・ムラクは廃址の状態であったが，その後，オランダ領東インド考古局によって散乱した石材の拾集と組立てが行われ，各部位（基壇，身舎，屋蓋）の仮組みが地上に積まれたが（Perquin, P. J., “Tjandi Mërak”, *Oudheidkundig Verslag* 1927, Weltevreden: Albrecht & Co./’s-Hage: M. Nijhoff, 1928, pp. 154-188），現在に至るまでその状態で放置されている。
- (54) 前掲書注(51)p. 31
- (55) 前掲書注(6)pp. 207-208
- (56) ブラフマー座像の像高は28cmである一方，屋蓋初層及び二層の壁龕の高さは，それぞれ80cm，46cm（前掲書注(51)p. 28）
- (57) 前掲書注(6)pp. 236-237
- (58) 前掲書注(6)pp. 209-210
- (59) Poerbatjaraka, *Riwayat Indonesia* Djilid I, Djakarta: Jajasan Pembangunan, 1951, pp. 53-54
- (60) 石井和子『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン（聖大乘論）』にみる古ジャワの密教』『東南アジア研究』27巻1号，1989, p. 58
- (61) Bosch, F. D. K., “De inscriptie van KEloerak”, *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 68, 1928, p. 51
- (62) 前掲書注(60)p. 68
- (63) 松長恵史『インドネシアの密教』法藏館，1999, pp. 128-168
- (64) 前掲書注(60)p. 68
- (65) 前掲書注(3) pp. 382-383
- (66) ムールティアスタカは，Bhava, Sarva, Ísana, Paśupati, Ugra, Rudra, Bhīma, Mahādevaの八神からなる（Liebert, G., *Iconographic Dictionary of the Indian Religions: Hinduism-Buddhism-Jainism*, Leiden: E. J. Brill, 1976, p. 185）わずかにRudra及びMahādevaの二神のみがナワ・サンガと重複する。また畏怖相のシヴァである八バイラヴァは八母神（Saptamātrkā）と組を成す一方，ナワ・サンガの諸神もそれぞれ神妃を有することが知られるが，八バイラヴァの内の少なくとも三神がナワ・サンガと重複し，また八母神の内の少なくとも四女神がナワ・サンガの諸神の神妃と重複するという（前掲書注(3) p.382）
- (67) 前掲書注(7)pp. 135-136
- (68) 前掲書注(3) p. 381
- (69) スクモノは，先述のチャンディ・スリカンディに認められる「三神の体系」に従った神像の配置を，ジャワ固有のものとして位置付けている（Soekmono, R., “Indonesian Architecture of the

Classical Period: A Brief Survey”, *The Sculpture of Indonesia*, Washington: National Gallery of Art, 1990, p. 68 ）。しかるに筆者は第3章において、「三神の体系」は、インドのヴァーストゥプルシャマンダラに類する神観念の影響を受けている可能性について指摘している。しかしこの問題の解明には、ジャワ及びインドのヒンドゥー教の図像学的な比較考察が必要とされるため、委細は稿を改めて検証を行うことにしたい。

- (70) しかしながら、このような「方位神」の発展系列では説明の困難な事例が認められることには留意が必要である。例えば、注(36)のチャンディ・スンプルジャティに見る事例、あるいは、ジャワの創世神話の一つとして知られる『マニック・モヨ』(*Manik Maya* 17世紀末～18世紀前半頃)には、Mahadewa(東)、Sambu(南)、Kamajaya(西)、Wisnu(北)、Bayu(中央)、Prit Anjala(北東)、Kuwera(南東)、Maha Yēkti(南西)、Siwah(北西)からなる九神について述べられている(前掲書注(36)pp. 133-135)。このように、様々な「方位神」のヴァリエーションがあったものとも推測されるが、同問題についての詳細は別稿に譲ることにしたい。
- (71) 青山亨「古代ジャワにおける方位と神格 - その源流と発展 - 」, 東南アジア史学会第295回関西例会, 小野邦彦「古代ジャワにおけるヒンドゥー教のパンテオン」報告に対するコメント, 2003, 4 頁目
- (72) 前掲書注(71)4 頁目
- (73) 前掲書注(71)4 頁目